

— 特別講演 —

日本語教科書編集の
おもしろさ・むずかしさ

小出 詞子
(姫路獨協大学)

ネウストブニー先生がICUの教材についてお話しになるとうかがった時、私は「しまった！」と思いました。と申しますのは、おそらくネウストブニー先生から、辛辣な批判が出てくるのじゃないかと実はひやひやしていたわけです。そしたら、わりにおてやわらかだったもので、安心すると同時に先生も随分おやさしくなったものだと思直したところでございます。

まあよけいなことは別として、私のは研究発表で申し込んだのですが、実は研究発表じゃないわけです。皆さんは、どうせ小出だから研究発表なんかじゃないだろう、新しいことはないだろうという期待でいらしたんだと思いますが、まさにその期待通りなんです。忙しいというのを口実にして、ただ私が今まで日頃言っていたこと、特に講義なんかで多少触れていたことをくり返したいと思います。皆さんの中で忠実に私の言うことを一語一句もれなく聞いていらした方にとっては、つまらないものになるだろうと思います。どうぞそういう方は居眠りなさってください。そうじゃなくて、私の講義を聞いていらしても、ときどき居眠りなさったり、あるいはちょっと他のことを考えて頭がぼーっとなって—という方は、あるいはもう一度お聞きになってもいいかと思いますが。

それではテキストのことについて。テキストの種類としては大きく分けて、集中的教育のため（統計的にちゃんとやったもの）。それからサバイバルのため—これは日本に来てちょっと旅行するために、あるいは生活上の必要のため。大きく分けると、この二つに分かれると思います。私の場合は前者のつもりで教科書を作ってまいりました。それから話し言葉中心か読み書き中心か。これは私はどちらにも片寄ることなくバランスをとったものを作ってきたつもりです。

- ① 1963 Modern Japanese for University Students, Part I (ICU)
- ② 1963-65 Let's Learn Japanese, vol.1-3 (Hitachi Co. Ltd.)
- ③ 1973 Easy Japanese, vol. I (Toppan Co. Ltd.)
1975 Easy Japanese, vol. II

④ 1985 日本語（にほんご／にっぽんご）（開拓社）

ここに私の書いた初級の教科書を年代順に並べてありますが、ネウストブニー先生は①を主に取り上げてくださったわけですが、これを作ったときには、先ほど先生もおっしゃったように他に教材がなかったのです。その前にICUで使っていたのは長沼の教材だったんですが、長沼の教材は非常によくできた教材なんです、大学で集中的に1年でびっしり入れるのにはちょっと問題がありました。だから、うちの学生にとにかくもっと集中的なものを与えなきゃいけないという観点から作ったわけです。ですから集中教育ということを私は初めから考えております。

②はvolume 1から3までで初級に当たるのですが、これは短波放送で放送するために作ったものです。放送してくれと言われて「引き受けましょう」と。だけど放送して耳からだけ聞いていると、記憶に残らないから、やっぱりテキストも作ったらどうでしょうか、とむしろこちらの方から願い出てテキストを作ったのです。ですからローマ字だけで読み書きは入っていません。読み書きを入れなかったことは今でも後悔していることで、幸か不幸かこの放送は20年ぐらい再放送されましたけれど、その後やめになって教材もなくなってしまうようですから、これについてはあまり申し上げません。

③は『Easy Japanese』といってもやさしくないじゃないと言われるんですが、少なくとも『Modern Japanese』なんかと比べるとやさしくみえるようなアプローチ。というのはVolume 1・2・3が薄い本でそれぞれ1冊ずつになっています。こんな薄い本ですから、これなら自分でもすぐできるという感じを持つんじゃないかと思えます。ところが、初め4冊でやるつもりだったのが、途中でもうめんどうくさくなって3冊で終わろうということになったので、1、2は薄いんですが、3は2冊分、重くなってしまった。まあこれはあとから口実をつけて、3冊ぐらいまでいく人はおそらく本格的に勉強する人だから、多少重くて、高くなってもいいだろうと勝手な理屈を付けたわけなんです。このときは一般向けにしたので、ローマ字を主にしました。出版社の方ではローマ字だけにしてくれと言ったんですが、私は少し強引に、いや、読み書きもつけないと問題だからと言って読み書きをそばにつけたということです。だけどこれはローマ字を主とした本なんです。今までのでおわかりになるように、この本を出した60年から70年代ではローマ字でやるということが主流になっていたわけですね。日本は別として外国なんかで主流になっていた。だからその主流のローマ字だけではもの足りないと思ったところに私の頑固さというのがあるんでしょうか。それで読み書きをつけておいたということです。

④最後に出しておいたのが『日本語（にほんご／にっぽんご）』。これは教科書の名前として『にほんご』は陳腐だから、『にほんご・にっぽんご』と読んでもらおうと出したわけなんです。「日本語」と漢字で出されたらそれを「にほんご」と読む人もいるし、「にっぽんご」と読む人もいる。書いた人の意図が必ずしも伝わらないわけですね。これは日本の地名、人名にも共通するものなのですが。だから日本の漢字と言うのはこういう問題があるんだぞということを初めに出したつもりですが、はたしてそれが学生にわかっているかどうか。

教材の内容としては、私がやったこれだけの初級の教材の中でほとんど変わっておりません。まず、基礎構文があるということ。それから、基礎語彙があるということ。初級ですから、1,200語～1,500語ぐらい要るんじゃないかと。それからこれにはアクセント記号がつく。これはネウストブニー先生も言ってくださいましたが、私もかなり気をつけてというか、強引にこれを守っているわけです。（アクセント記号ってめんどくさいので、出版社はいやがるんですが。）というのは、結局外国人にとって、アクセント記号がついてないと、どう発音していいかわからない、で、どう発音するのかという質問をクラスでも受ける。そのたびに言っていると大変なので、一応学生のためということでアクセント記号はつけてきたということですね。

それからついでに、無声化の記号も。やはり日本語、特に共通語のことを考えると、今後大事な問題になるんじゃないかと思って無声化をつけたわけなんです。これは『にほんご／にっぽんご』になるとつけなかった。なぜつけなかったか。これは大事じゃないからつけないというのではなくて、ここで私はまた勝手に考えて、無声化というのは規則があるわけです。（先ほどおっしゃったような規則が。）だから規則を教えればそれでいいだろうと思ってつけなかったんですが。ただ最近、関西に移って、関西はごぞんじのように無声化はあまりないところですから、やはり一つずつつけておいた方がよかったかなと思っておりますが。

それから基礎漢字。これも初級でどれぐらい漢字を教えるかといういろいろ議論があるところですが、一応 500としました。

それから、モデル会話を出すということで、そこに文体の差が出せると思います。文体の差というのは、私としては普通のだれが使ってもいいのと、それからくだけた形、つまりいわゆる「です・ます体」と「くだけた形」ということにしました。学生がどの程度使っているかは別として、「です・ます体」は自分が使うものとして。よく言うんですが、「先生に向かって『あした行くよ』なんて言ったら、点引かれますよ」というふうに。点と言うとびくっとするの

でそれでおどかしているわけなんです。先ほどお話にあったように、ICUは寮がありました。外国人の学生は一応寮に入ることになってたわけですね。寮だと、寮の友達から聞く会話というのは、全くクラスで習うのとは違うわけなんです。たとえば、日本人の学生で「行きましたか」なんて言ってくれる人はいないわけです。たとえ初級の学生でもおかまいなしに「行った？」と聞くので、「行った」というのと「行きました」というのは簡単なようで、教えないとわからないんですね。そういうところから、くだけた会話は友達から聞いてわかるだけのものとして出そうということなんです。ですから、ラボなんかで1、2度聞かせるだけ。教室では一切練習しない。ただ、ラボでは自分で自由に聞ける時間があるわけですね。そのときに「聞くな」と言うとかえって聞く人もいるらしいんですね。(学生にはやっぱり私みたいにつむじ曲がりかいて。)ときどきまわっているとinformalなところを一生懸命聞いている人がいますけれども、まあそれは学生の勝手にこちらとしては、とにかく「です・ます体」をしっかりと使えと。だから、たとえ日本人の学生から「行った？」と聞かれても「行きました」と答えなさいと、こういうふうなやり方をやってるんですね。どうしても、とかくくだけた方になってしまうんですね。

だいたいそこまでが主教材の内容として、一応『にほんご／にっぽんご』でもここまではできてはいるんですが、そのあとがいけないんですね。私はこう思うということ、実際にやるということは違うらしいんですが、教科書作成にあたって、やろうと思うことはもう何年もあたためているんですが、それがなかなか現実に出てこないということです。たとえば補助教材の内容の中で、発音練習。これは発音を書いているだけではなくて、発音についてももう少し出さなきゃいけないということで、『にほんご／にっぽんご』は、初めの方に語彙がでていて、語彙に発音がちょっと出てるので、先生の中で、発音に興味のある方はそこをお使いになればまあできるんですけど、もう少し学生が読んでわかるような説明がほしいということですね。

それから文法説明。これはもうしかたがないので、文法の英語の説明だけは『にほんご／にっぽんご』のときも初めから出して、学内では使ってます。ただ、学外にちゃんとした形で出すというのがなかなかできないので、今のところ、学内だけで使っている。これも中国語、韓国語というのもつけたい。これは日本における日本語教育の主流をお考えになっていただければわかると思います。これについては、大学院の学生とスタッフの協力を得て、だいたいできています。いくら私でももう10年近くたつんですね、この『にほんご・にっぽんご』ができてから。だから10年までにはこの補助教材をちゃんとした形で作れるようにと思っています。

それから文字練習については、筆順、辞書機能などが必要ですが、これも先ほどいったスタッフと大学院生の協力を得てほしい原文ができてます。

音声テープは初めからできてますが、やはりテープというのとはところどころ悪くなったりするので、これをもう一度ちゃんとした形で作りたい。だからこの補助教材が全部できたら一応私としては最低のものができるんだと。だからぜひそれまでは生きてなきゃいけないなとは思っているんですがね。

で、今後の課題というのは・・・それについてはネウストブニー先生もいくつか言ってくださったから、そういうことを当然考えなきゃいけないと思います。これからなさる方、あるいは今やってらっしゃる若い方に申し上げたいと思うんですが、教材作成にはあまり私のように時間と精力を使わない方がいいんじゃないかと。というのは、教材作成というのは実に時間がかかるものです。時間も精力もかかるわけです。日本語教育を始めた方はすぐ「教材がないから教材を作りたい」と。その熱意はかうんですが、そういう方は少しやるともうそれ以上続かなくなってしまうということがありますね。だから教材を作りたいという気持ちは、それぞれお持ちになっていいと思います。教材を作って自分の学生に一番いい教材を与えたいと。この熱意もいいと思います。ただ、あせって教材を作るとあまりいいのができないんじゃないかと。私の場合には『Modern Japanese』を作る前にざっと10年近く教えていました。(10年のキャリアが今必要かどうかということは疑問ですが、)そのキャリアと夏休みをたっぷりこれに使ったわけです。たっぷりと言うとおかしいんですが、ICUはお休みの期間は短いです、その間は自由に使えるわけですね。だから私は山にこもってこれ一筋にやったということです。それからICUの方の協力でそのときに事務の人を一人つけてくれた。タイプを打つ人ですが。それだけのことがあって、やっと9月の始業になんとか間に合ったということです。

今、日本語教育はますます忙しくなってくる。先生たちもほんとお忙しい。だから忙しい間に教材を作って、と言っていると、教えることに使う時間がなくなってしまう。だから、少なくとも初めの2、3年は教えることに集中する。教えるための準備とかなんとかでいろいろありますからね。で、その次に今度はいよいよ教材を作ろうと考えたら、いきなり作るというのでなくて、もっと教材研究をしていただけたらと思います。今、教材はたくさん出ています。だからこれは選挙と同じで、ベストのものはなくてもベターのものはあると思いますね。だからそれを使って、それを補充していく。先生たちの精力と時間を補充にあてるという方向にお使いになる、それで数年して余裕が出てきたら教材作成にあたれるんじゃないかと思えます。

で、私の場合には、あと残っている時間、少なくとも補助教材だけはし終え

たいと思います。これができたとしても、あくまでも初級なんですね。そのあとに中級、上級と呼ぶか、これを二つに分けて中級の上・下と呼ぶか、これは別として、日本語の基礎としては必要です。

それから『にほんご／にっぽんご』は少し厚すぎたかなと思ってるんですね。まあこれ、学生は一生懸命かかえてやって来ます。

中級、上級ですが、上級になるとほとんど日本人向けの市販のものですから、市販のものに先生たちがそれこそ補助教材をつけてお使いになってもいいと思います。一番問題だったのは中級なんです。この段階で読める読み物は、非常にやさしいというものを選ばなきゃいけなかったということですね。それで『Modern Japanese』の初級の方はだいたい語彙は1,200ぐらいあるのですが、漢字が400しかなかったんですね。そうすると中級にいったときに、これをお使いになった方はおわかりになると思いますが、この間のギャップが非常にひどくてむずかしかった、と言うことがあります。その場合に中級をやさしくするか、初級を難しくするか、そこに私の選択の余地があったんですが、初級は今から考えるとやさし過ぎるのではないか、初級のときに少し押さえつけておくとあとがスムーズにいくんじゃないかと考えて、初級を少し難しくした、それが『にほんご／にっぽんご』になったということなんです。だから、中級、上級をどうするかというのが今後の課題です。

それから私の方法は古い方法なので、何かもっと新しい方法があるかもしれない。特に視聴覚教育を取り入れたものがあるのかもしれない。実は私がすぐ考えるのは、構文を練習するときに、視聴覚の絵でも見せてそれでやればいい、その絵を先生たちがいちいち書いていると面倒なのでビデオみたいなものにしたと思って。これは私がまだICUにいたときに村野さんにご相談したことがあります。で、村野さんが作りかけてくださったんですが、それがまだ終わっていないということなんです。私はそれがいけないと思ってやめたんじゃない、とにかく私の時間、精力、主に頭の方が足りないのではなかなかそれだけできなかったということなんです。

こんなことで時間は過ぎたんですが、何かみなさん得ることがあったでしょうか。何か一つでもあったらありがたいと思っています。